

## 提題

## 類 比 と 象 徴

今 道 友 信

## 希 望 と 象 徴

類比について、前の二人の報告者が、それぞれ、古代ギリシアにおけるその原型及びそれを継承発展させたトマス・アクイナスの存在の類比について、基本的な考察を示したので、本来この問題に関し、中世哲学の大筋からみれば、私の加へるところは何もない。しかし、中世は単に古典ギリシアと13世紀を結ぶ線、すなはち、アリストテレスとトマスの思想に尽きるものではない。類比に関しては、私の見るところでは、教父時代と12世紀を逸することはできない。これら二つの時代を、類比に関する一つのテーマで一括して考へようとするれば、「類比と象徴」といふ視点に於いて考へることになるであらう。何故であらうか。

教父時代と12世紀とは、そこに於いて営まれた哲学的思索に関する限り、一つの著しい共通点を有してゐる。それは力溢れる予感的過渡期の常として、希望の世紀と呼ばれてしかるべき傾向が強い、といふことである。もとより、希望は対神徳すなはち信・望・愛の一つに数へられ、いつれの時代にせよ凡そキリスト教が問題とされる限り、必ず語られる心的現象である。しかしながら、不動の信仰に支へられながらも、自己の思想を未だ明確には体系化するをえず、しかもなほ、やがて収斂すべき形態を予感して発酵を続ける時代は、わけても希望の時代なのである。希望は未だ見えないもの、現実には知らないものを、心に繋ぎ止めることが必要になるやうな心的状態である。それは不可視的なものを、可視的なものを通じて、念じつづけねばならない。従つて、希望の世紀は当然象徴の風土を醸成する。

この問題の一つの鍵は聖書である。聖書は人間に真の希望の何であるかを教へるものだからである。キリスト教の信仰に立つ限り、聖書とは神の言葉の連続である。しかしその神の言葉はいかなるものであつたか。●*uidquid in sermone divino neque ad morum honestatem, neque ad fidei veritatem proprie referri potest, figuratum esse cognoscas.* (*De doct. christ.* 3, 10) 「神の言葉の中で、人倫の正義や信仰の真理に本

来的に結びつけがたい一切の言葉は、比喩的に語られたもの (figura) であるとわきまへよ。」といふアウグスティヌスの言葉はその後の数世紀を支配する。すなはち、言葉にはその「本来の意味」(signa propria) のほかに「移し変へられたる意味、すなはち比喩的な意味」(signa translata) があり、従つて「比喩的な言葉の両義性」(verborum translatorum ambiguitates) (*ibid.* 3,5-37 2,11-14) の解釈 (interpretatio) が哲学の重要な課題となる。この移し変へられたるもの (translatum) とはギリシア語の metaphora (ある場所から他の場所へと移し変へられたるもの) のことであり、それはアリストテレスによると以下の四種の移し変へがあることになる。すなはち、(1) 類から種へ、(2) 種から類へ、(3) 種から種へ、(4) 類比 (analogon) に基づいて、の四種である (*Poetica* XXI, 1457 b)。ところでこの最後の類比に基づくメタフォラ (隠喩) とは、アリストテレスのあげる例によれば、次ぎの通りである。すなはち、老年の人生に於けるは夕べの一日に於けるが如くであるから、人は老年を人生の夕べと呼び、夕べを一日の老いたる時と称することができる。老年を人生の夕べと言ふのは一種詩的な美しさを感じさせるであらうが、このやうに、「巧みな隠喩をつくることは天賦の才による」とアリストテレスは述べてゐる (*ibid.* IV, 1406 b-7a)。しかし、アウグスティヌスはこのやうな隠喩を「本来の事態に関する意味ないし語彙を非本来的な事態に転換することにはかならない」(*De mendacio* X) として警戒しており、好んで認めようとしたのは、彼の場合、寓意 (allegoria) のみであつた。そのやうに考へた一つの理由は、聖書が寓意 (一つの意味を表はす語を言ひながら他のこと —allos— を語る —legein— こと) に満ちてゐるからであるが、今一つの理由は、そもそも寓意に於いては直喩 (simile) や隠喩 (metaphora) と違つて概念的理解の対象となりうる可能性があるからである。たとへば、ニュッサのグレーゴリオスが燃える茨の方向に近づくモーゼの脱沓 (discalcetatio) についてその脱沓の事実に意味そのものを認めつつ、同時にそのより高き意味は何であるかと問うて、この世の罪の衣を脱いで神に近づかうとする信仰的勇氣 (parresia) と考へることなどがあげられる。

ところで、アウグスティヌスによってむしろ拒否せられたところの隠喩 (metaphora) が、しかく拒否せられた理由は、それが結局本来的な意味を失はしめ、かくて語の真実に背反する虚言 (mendacium) を生むからであつた。しかし、すでに

述べたやうに、アリストテレスはかかる隠喩こそ詩人の天才を示す場面であるとしてゐたが、この詩芸術の特色は、それでは、アウグスティヌス以後の中世に於いては単なる虚偽として否定せられ去つたのであらうか。

### 象 徴 と 超 越

アリストテレスを直接継承すると目されてゐるトマス・アクイナスは、アリストテレスが注目した詩的価値としての隠喩 (metaphora) に対して、はなはだしく拒否的である。(in metaphoricis locutionibus non oportet attendi similitudinem quantum ad omnia) (*Summa theologiae* III q. 8, a. 1, ad 2) 「隠喩で語られる事柄に於いては、すべての点に於いて、類似性が認められるとは限らない」から、知性は隠喩がえてしてもつところの形象性に依存すべきではないとして、「形象的表現から論証を期待してはならない」(Ex tropicis locutionibus non est assumenda argumentatio) (*Expositio super Boethium de Trinitate* prooemium q. 2, a. 3, ad 5) といひ、更に、「詩人は多くの点に於いて世の諺にもある通り、虚偽を述べるものである。」(Poetae non solum in hoc, sed in multis aliis mentiuntur sicut dicitur in proverbio vulgari) (*Commentaria in Metaphysicam* L. 1, lect. 3, 63) と述べ、詩人の特色としての詩的表現を真理からは遠い営みであると断罪してゐる。しかし果たしてそのやうな考へが事態に即したものであらうか。もしトマスの難じた通りであるとすれば、アウグスティヌスを初めとして、多くの神学者達がそこに真理を求めて解釈したところの詩篇—旧約聖書中最も詩的な巻であり、しかも聖書一般の性格として神の眞実に支へられた言葉である—はそもそも如何にして真理の証言となりうるのであらうか。トマスの死後、豊かな夢幻的形象を駆使して隠喩の世界を織りなしたダンテの『神曲』は、ゲルソンや大沢章も述べる如く、ほかならぬトマス・アクイナスその人の思想の詩的結晶である、といふことは、隠喩による詩を難じたトマスにとつてはまことに皮肉な反証の事態ではなからうか。神の眞実としての超越的事象は、隠喩を含めた詩的表現なしに、思索せられ尽くすものであらうか。常に予感的に超越を仰望した12世紀の哲学者達は、この点では明らかに、その他の点に於いては彼らの継承的完成者と目せられる13世紀の哲学者たるトマスを、はるかに實質的に凌駕してゐた。確かに、詩人は論理学者のやうに常に論理的に眞なる命題を提示する

ことを目標とするものではない。しかし、それだからと言つて、詩人は自己の感傷を常に偽るものであると言ふことができようか。むしろ詩人は、未だ彼自らにとつて明確には認識せられてはゐないものの自己の実存を揺るがすやうな内的衝迫の事実を、能ふかぎり真実に吐露せんと企てるものではなからうか。また、そのやうな天来の迫衝を懂れて、未だ来たらざる前に夢み思ひ描くのではなからうか。それらの言はば非論理的な形象的表現は、自ら論理学者ではない詩人その人にとつて、なほ決して論理的には明らかにせられえぬにしても、もしそれが何らかの意味で人間の真実にかかはるものであるとすれば、等しく真実を求める論理学者の思考に、どうして関係がないと言へようか。ソールスベリーのヨハネスは、「詩人の虚言も真理に奉仕することがある」(Mendacia poetarum inserviunt veritati) (*Polycr.* 1. 186) と述べ、従つて一見華麗な「言葉の綾にしか見えない文飾の下にも真実が潜んでゐる」(sub verborum tegmine vera latent) (*Entheticus* 183) ことを認め、詩に対する象徴的解釈の必要性を、あたかもアウグスティヌスが聖書に対する寓意的解釈のそれを強調したと同じく、我々に訴へかけるのである。リュのアラン (Alain de Lille) は、それに呼応するが如く、「抒情詩は文字といふ表皮に於いては虚偽を響かせもするが、内的な耳をもつ者にはより高き智恵の秘密を語りかけ、その結果、虚偽の表皮を剥取り、内的な読者はつひに真理の甘やかな核を秘かに見出すに至る。」(In superficiali litterae cortice falsum resonat lyra poetica, sed interius auditoribus secretum intelligentiae altioris eloquitur, ut exteriori falsitatis abjecto putamine, dulciorem nucleum veritatis secreta intus lector inveniat) (*De planctu naturae*, P.L. 210, 451CD-452D) と述べ、詩の解釈が哲学上の真理に至りうる可能性を明示して、「詩と哲学が弟と兄の関係である」(puerilis disciplina poeticae, senior tractatus philosophiae) (*ibid.*) といふことにより、アウグスティヌスが芸術 (美への愛—philocalia) と哲学 (智への愛—philosophia) とを妹と姉の関係に見立てたのを想起せしめるやうに、一般に芸術が真理と無縁であり、かつは虚偽であり、人の感傷を徒らに誘ふに過ぎないと考へられてゐた中世の風土に、再び芸術の価値を詩を介して高らかに表明する。それは何故かと言へば、一般に詩が内部に真理を隠しもつてゐるからにはかならない。

## 象 徴 と 方 法

詩が内部に真理を隠しもつことは、言語の普通の用法では表はし得ない神秘を、詩がその内部に内包してゐることではなく、そのやうな神秘を象徴的に暗示するに足る指示力を内包してゐるといふことにほかならない。そのことは、また、精神が詩の表面的な意味から、その隠されてゐる内的な意味にまで潜入することによつて、この指示力に従つてその方量に自己を向けしめたときのみ、神秘を仰望することが許される、といふことにほかならない。従つて、言ふまでもなく、精神は詩的言語に於いて明らかに、その外的な意味と内的な意味が、或る何らかの点に於いて一致しつつも、異なつてゐるといふことを見抜いてゐなければならない。といふことは、象徴とは可視的な意味形象と非可視的な事態の二者が一つの語に於いて共に置かれてゐることによつて可能となる、といふことにならう。それ故、サン・ヴィクトールのフーゴーは *Symbolum est collatio, id est coaptatio visibilium formarum ad demonstrationem rei invisibilis propositarum*. 「象徴は共に置かれてゐること (collatio) である。すなはち、見えるものの通常形象を適当に利用して見えない事物を証示することである」(*Expositio in Hier.* cod. III P.L. 175, 960) といふことができた。ここで *demonstratio* といふ通常は論証と訳さるべき術語を証示と訳したのは、シュニユ (M.-D. Chenu) が『12世紀の神学』(*La théologie au douzième siècle*, 1966, Paris) に於いて、これは *monstrance* と訳さるべきであると注意してゐるのに従つたからである。このやうな象徴的証示が可能であるためには、何らか方法的根拠があるのであらうか。少くとも、聖書に関しては、語の象徴意味について一定の約束を発見し、これを整理した試みがあつた。それは前掲のリユのアランにもあつた *distinctiones* (語義識別表) といふ書物の試みである。たとへば、シュニユが前掲書で挙げてゐる例を利用すれば、セルのペトルスの *distinctiones* に於いて、*domus* (家) といふ語は以下の四つの意味がある。(1) 字義通りに建物としての家、(2) 修辭学的転用として魂、(3) 寓意的意味として教会、(4) 上方指示的 (*anagogicus*) 意味として天国の光栄、である。これによつて明らかやうに、象徴はそのものとして単独に自己の意味をもちつつ、自己以上のものの記号として有効な作用をもつ。単なる文字や指標は、これに反して、意味された意味しかもたない。

この意味された意味といふ一義性に立脚した論証に対して、象徴による証示は、あたかも類比による隠喩的指示と相似た印象を誘起する。しかし、右に述べたやうに、両者は構造的には異なつたものである。寓意は現象を概念に転換し、その概念を該現象の典型的形態に形象化する。しかるに、象徴は理念を現象によつて形象化しようとする。語が象徴となつた場合に多義的となるのは、理念と現象の距離の故であつて、類似による類比の距離の近さとは異質のものである。